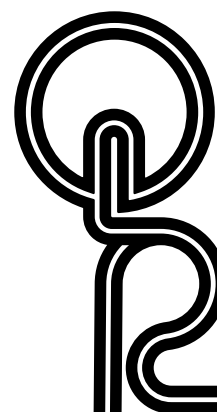


QR Newsletter

第四紀通信

Vol. 8 No. 6, 2001



三宅島2000年噴火により降下した火山灰の現況。白い部分は降下物最上部が残存している部分で、それ以外はある程度の侵食を受けている部分。侵食の度合いは地表面の傾斜や植生に強く依存する。2001年9月18日、旧雄山南西2km、村営牧場付近で鈴木毅彦撮影。

Vol. 8 No. 6		December 1, 2001	
シンポジウム等のお知らせ	2	IGCP437 国際研究集会報告	6
講習会等の案内	3	第四紀研究連絡委員会議事録	8
The International Meeting on both Sea-level changes and Coastal Evolution & Neotectonics (INQUA) in Taiwan 報告	5	INQUA 大会招致検討WG 議事録	9
		幹事会議事録	10
		会員消息	10

「旧石器時代研究の新しい展開をめざして - 旧石器研究と第四紀学 - 」

2002年日本第四紀学会・日本学術会議第四紀研究連絡委員会共催シンポジウム

開催日時 2002年2月23日(土) 10時30分～17時10分まで

開催場所 東京都立大学講堂小ホ-ル 東京都八王子市南大沢1-1 TEL 0426-77-2121

発表内容

- 10:30 開会挨拶 小野 昭(日本第四紀学会幹事長)
10:40～11:25 基調報告1:御堂島 正(かながわ考古財団)
「遺跡形成論から見た堆積物としての遺物」
11:25～12:10 基調報告2:五十嵐 彰(東京都埋蔵文化財センター)
「形式と層位の相克--石器と土器の場合--」
12:10～13:10 昼食休憩
13:10～13:55 基調報告3:馬場悠男(国立科学博物館)
「人骨形態学的判断の信頼性と限界」
13:55～14:40 基調報告4:町田 洋(東京都立大学名誉教授)
「遺物包含層の年代と環境」
14:40～15:00 休憩
15:10～17:10 総合討論 司会 小野 昭
17:10 閉会挨拶 町田 洋(日本学術会議第四紀研究連絡委員会委員長)
17:30～19:30 懇親会(東京都立大学学生協食堂ホ-ル)

世話人:小田静夫(東京都教育庁文化課埋蔵文化係)

連絡先:oda2@jcom.home.ne.jp 電話 03-5320-6863 FAX 03-5388-1734

地球惑星科学関連学会 2002年度大会のお知らせ

日時:2002年5月27日～31日

場所:国立オリンピック記念青少年総合センター
(〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町3-1)

第四紀学会からのレギュラーセッションとして「第四紀(Qm)」を設けております。オーラル・ポスターの発表を受け付けます。発表数が20を下回るようになりますとレギュラーセッションとしての定着が危うくなりますので、積極的ご参加をお願いいたします。なお、セッションのプログラムは現在大会プログラム委員会にて作成中ですので、随時下記のWeb siteにてお確かめください。

予稿集原稿受付は、2002年1月10日～2月28日(下記Web site)にて。
参加登録・宿泊予約 2002年1月10日～3月29日(下記Web site)にて。

詳細は 公式Web site <http://www.epsu.jp/jmoo2002> にてお確かめください。

日本第四紀学会 2002年大会(第1報)

一般研究発表・総会・シンポジウム: 8月23日～25日 場所:信州大学(松本市)
普及講演会: 8月24日 場所:松本市Mウイング(予定)
野外見学会: 8月26日

第8回日本第四紀学会講習会について（予告）

テーマ：「海底コアの採取・分析法」, 「海洋研究の基本技術」などを検討中.

開催場所等 日本第四紀学会主催で、都内で開催予定.
開催時期 現在検討中.

詳しい内容が決まり次第追ってお知らせいたします。

第3回 考古地形学・古環境復元に関するフィールドコースのご案内

主催 中近東文化センター・アナトリア考古学研究所
期間 2002年9月15日～28日(15日間)
場所 トルコ共和国クルシェヒル県カマン・カレホック遺跡発掘調査隊キャンプ

講師 鹿島 薫(九州大学大学院理学研究院地球惑星科学教室)
電話 092-642-4351 fax 092-642-2686 e-mail kashima@geo.kyushu-u.ac.jp

費用 5万円(滞在費、食費、巡検費用などの期間中の諸経費)ただし、現地までの交通費は別途自己負担となります。

対象 地理学・地質学・考古学などを専攻する大学院生・学部生及び若手研究者
募集人数 4～5名

主な内容 遺跡発掘調査に付随して行われている地形地質調査、古環境復元調査に関する講義及び実習。約4日間の野外巡検が含まれます。

申し込み締め切り 2002年2月1日(金)

申込方法 400字程度の希望理由を添えて、鹿島までe-mailで申し込み下さい。

なお、上記フィールドコースに関する説明会を2002年1月26日(土)午後3時から中近東文化センター(東京都三鷹市大沢3-10-31)で開催します。参加者希望者は事前に関鹿島までご連絡ください。

その他、このフィールドコースに関する問い合わせも、鹿島まで直接ご連絡下さい。

学生会員の皆さまへ「学生会員継続届け」提出のお願い

現在2001年度の年会費の請求が届いているかと思いますが、2000年度から学生会員は、毎年在籍中であることを「学生会員継続届け」として提出して頂くことになっています。A4判の用紙(様式自由・フープロ使用)に、申請者の所属・学年・氏名・連絡先・指導教官氏名を明記のうえ、指導教官の署名または捺印を添えて、2001年12月末日までに日本学会事務センターまで郵送してください。本届けが提出されない場合は、次年度より正会員として登録し、正会員会費にて会費請求がされますので、ご注意ください。なお、本年度、学生会員として入会された方も提出願います。また、日本学術振興会特別研究員(PD)や科学技術特別研究員などは通常会員となります。

問い合わせ先：庶務幹事 鈴木毅彦
(TEL 0426-77-2594、E-mail : suzuki@comp.metro-u.ac.jp)

送付先：〒113-8622 東京都文京区本駒込5-16-9
(財)日本学会事務センター3階 日本第四紀学会事務局宛
TEL : 03-5814-5801 / FAX : 03-5814-5820

提出方法：郵便に限ります。

締め切り：2001年12月31日(必着)

Continent-Ocean Interactions within the East Asian Marginal Seas A Chapman Conference of the American Geophysical Union

14-17 October 2002, The Bahia Resort, San Diego, California, USA

Conference Objective:

The marginal seas of the Asian continent represent natural laboratories for the study of a wide variety of geologic processes, that are of strong interest to the broad earth and ocean science community. These basins form the transition between the world's largest continent and largest ocean and are major repositories of information on the interaction between the two within the tectonic, geologic and climatic spheres. In this meeting we propose to bring together an international and multi-disciplinary group of ocean and earth scientists to examine the origin and development of these basins. We especially hope to foster interaction between normally separate communities such as tectonic and oceanographic workers.

The meeting will focus on the Andaman Sea, the South China Sea and its associated Malaysian basins, the East China Sea, the Okinawa Trough, the Yellow Sea, the Sea of Japan and the Sea of Okhotsk. Together these form a series of major basins whose origins may be related and whose development is linked directly to the tectonic evolution of continental Asia. The possibility of direct onshore-offshore correlation is what makes this region especially attractive for study, and unique from the oceanic marginal basins of the SW Pacific. Understanding how the evolution of Asia and the Pacific Ocean affects the marginal seas is the key goal of the meeting. In addition, we aim to examine solid earth-climatic coupling in this region.

Conveners:

Peter Clift, Department of Geology and Geophysics, Woods Hole Oceanographic Institution, Woods Hole, MA 02543, pclift@whoi.edu

Pinxian Wang, Department of Marine Geology and Geophysics, Tongji University, Shanghai 200092, People's Republic of China, pxwang@online.sh.cn

Dennis Hayes, Lamont-Doherty Earth Observatory, Columbia University, P.O. Box 1000, 61 Route 9W, Palisades, NY 10964, deph@ldeo.columbia.edu

Scientific Committee:

Peter Clift, Woods Hole Oceanographic Institution, Woods Hole, MA, USA

Pinxian Wang, Tongji University, Shanghai, P.R. China

Dennis Hayes, Lamont-Doherty Earth Observatory, Columbia University, NY, USA

Yoshiki Saito, Geological Survey of Japan, Tsukuba, Japan

John Milliman, School of Marine Science, College of William and Mary, VA, USA

Char-Shine Liu, Institute of Oceanography, National Taiwan University, Taiwan

Steven Dorobek, Texas A&M University, College Station, TX

S. K. Chough, Seoul National University, Korea

Jason Ali, University of Hong Kong, Hong Kong, P.R. China

Joe Lambiase, University of Brunei, Brunei

Cung Thuong Chi, Institute of Geological Sciences, Hanoi, Vietnam

Robert Hall, Royal Holloway, University of London, UK

Anne Briais, Universite de Montpellier, France

Wolfgang Kunht, University of Kiel, Germany

詳しくは以下のホームページを参照して下さい。

<http://www.agu.org/meetings/chapman.html>

<http://www.whoi.edu/pclift/EAB.html>

The International Meeting on both Sea-level changes and Coastal Evolution & Neotectonics (INQUA) in Taiwan 報告

山口 勝 (NHK アナウンス室)

2001年10月17日から24日まで、INQUAのsea-level change, Tectonics両委員会合同の国際学会が台湾で開かれた。台湾のINQUA加盟と1999年台湾大地震(集集地震)2周年を機に世界14ヶ国から約70人が参加。日本からも15人が訪台し、2日間の口頭発表、ポスター・ビデオセッションと4日間の台湾東海岸及び1999地震断層巡検が行われた。アメリカで起きたテロ事件などにより基調講演予定者を含め、北米、欧、豪などからの参加が急遽キャンセルになるなどの影響はあったが、オーガナイザーの国立台湾大学劉平妹教授などの努力で、きわめて充実した学会となった。

私は、台湾地震の取材以来2年ぶりの訪台。今回は、ジャーナリストではなく初心にもどって研究者の卵(ずいぶん泥土の中でねむっていたからピータンか)として台湾東海岸の完新世段丘からみた地震性地殻変動についての口頭発表(共同研究者太田陽子横浜国立大学名誉教授)と“NHKサイエンスアイ 検証!台湾大地震”(1999年10月放送)のビデオ発表をおこなった。

学会初日は、海面変化と地殻変動研究がテーマ。フランスPirazzoli, P. A. とDumas, B. による基調講演があり、それぞれ地中海地域の後期更新世海面変化と地殻変動の研究を紹介した。なかでもDumas はstage 3, 4, 5の段丘に幾千年オーダーの気候変動に対応したMinor Terracesの存在を報告。地震性の間欠隆起ではなく、気候変動に伴う海面変化で解釈できる可能性を強調した。ドイツSchwarzer, K., フィンランド Eronen, M. は、それぞれスカンジナビア半島のアイソスタティックな隆起と沈降の最新研究を発表。急速な隆起に伴って安定した陸域に断層も発達していることなど、私には新鮮な内容だった。大村明雄、前田保夫、フィリピン Siringan, F. は、Jシリーズ年代試料によるフィリピンの地殻変動と海面変化を論じ、環太平洋地域で空白域であった新たなフィールドでデータが蓄積されつつあることがわかった。

午後からは、台湾の海岸地域の完新世地殻変動と地形発達、地震性隆起などを中心にした台湾の劉平妹、謝孟龍、沈素敏そして山口勝の発表がつづいた。台湾東海岸は、プレートの衝突によって世界的にも急激な隆起(>10m/ka)速度をしめしていること。地震性隆起による完新世段丘の多段化だけではなく、台風などによる海岸侵食力、岩石コントロールなどの差に段化の可能性があることなどが示された。また特筆すべきは東海岸、都蘭の露頭である。そこでは、海拔6mの波蝕台上の海成砂層中の貝化石から13~12kaの¹⁴C年代が得られた。後氷期の

低海水準期の海底堆積物が海面上に顔をだしている場所は、世界中をさがしてもそうめったに出会えるものではない。私自身この地域の急激な隆起がどんな断層によって引き起こされたのか、またいつから始まったのか、さらに研究を進めなければ行けないテーマであり興味深いフィールドである事を再認識した。このセッションの発表者の殆どは、私が台湾を歩いた10年ほど前お世話になったり、激論を交わしたりした師や仲間である。当時は、外国人が単独で海岸調査するなど前例がないこと。国防上の理由から、海に向かって写真をとってもいけないし、海岸には銃を持った兵士がたっていた。地形図も空中写真も研究室から持出しはもちろんコピーも禁止。「1枚なくなれば管理者が4年投獄される。」という中で調査だった。国防部から出された調査許可証を胸に、なにかあったら“請看一看”と言おう。片言の中国語と英語で、一人東海岸を歩いたことがおもいだされた。しかし今回巡検で訪ねた東海岸は、道路の幅が倍以上にひろがり、兵士がいた監視小屋もなくなっていた。観光施設も立ちリゾートの雰囲気さえある。十年一昔だ。

学会2日目は、活断層と防災、テクトニクスなどがテーマ。太田陽子の基調講演から始まった。台湾でも地震後トレンチ調査や活断層調査が始まっている。活断層として認定されていた場所で、地表地震断層が現れたこともあり、活断層の認定の重要性が認識され始めている。しかし活断層の認定について、まだまだ見落とされているものも多い。それは写真判読などによる地形学的アプローチが不十分である事。累積性や繰り返し間隔をいうための年代資料に乏しい事。などが研究上の問題点として指摘さ

INQUA Taiwan meeting 巡検参加者。台湾東海岸北回歸線記念碑前にて(写真 山口勝 / Donn Gorslin)

れた。また、次のフェーズとして“新編日本の活断層”のような活断層アトラス制作の必要性も提案された。続くニュージーランド国立核地球科学研究所 Stirling, M.W. の基調講演では、活断層と防災、強震動ポテンシャルマップ、ハザードマップ制作の事例が紹介され、地球科学者からシビルエンジニアリングや都市計画に至るまで連携することの必要性を示していた。個人的には一般市民にも届き、役立つ防災科学情報とはなんなのか、どんな形ならば利用してもらえるのか、わかってもらえるのか、NHKで防災情報を担当する立場からも興味深かった。

会議後の巡検には約30人が参加。ほぼ台湾一周の行程を飛行機とチャーターバスを使って、4日で回った。前半2日の東海岸では、完新世段丘が多段化しているが、更新世段丘はまだ確認されておらず、それが急激な隆起と侵食によって削り去られたのか、それとも他の理由によるのか議論となった。後半2日の1999地震断層では、今は震災記念館となっているグランドが変形した光復中学校をたづねた。地震直後の取材であの映像を撮影しいち早く日本で放送したことが思い出された。さらに逆向き低断層崖が累積的変位をしている場所やトレンチ調査現場のひとつを訪ねた。また学会の2週間ほど前に台湾を襲った台風の影響で、車籠埔(嘯は土へんで

す)断層南端の茶畑の右横づれを見に行く途中通った加走寮溪という川では、大規模洪水、とうよりは土石流が本流を飲みこみ、橋や堤防、家屋を押し流してしまっような生々しい現場に偶然であった。その光景に巡検参加者から思わず声が漏れ、ついに臨時STOPとなったのだが、活断層、隆起速度の速さ、そして台風をはじめとする桁外れの降水が、台湾のダイナミックな地形を形づくっている事を改めて実感した。

私はジャーナリズムの側からさまざまな科学研究を見ている。その立場から今回少し感じたことを最後に記したい。日本からの参加者は台湾について多かった。オーガナイザーにも日本から太田陽子、大村明雄が加わり会を成功に導いた。こういった国際学会などをオーガナイズする人材がいることは非常に重要な事だと思う。台湾に向かう前日ノーベル化学賞受賞が決まった野依良治氏にインタビューをしたせいもあって、私自身少々頭でっかち、気負い気味になっているのかもしれないが、自らの研究はもちろん国際学会のマネジメントや貢献も国際的評価につながることは間違いない。野依氏はノーベル賞に限らず多くの国際的な評価を受けている。今、既成の学問領域にとらわれない学際分野や融合領域が注目されるなかで、第四紀学会はもともと様々な分野の研究者が集まり、総合的に探求するという風土を持ち合わせている平たく言えば、へんな名前だけど面白そう”な学会だ(現に今回休暇取得のため第四紀学会を上司に説明するのに苦労した。これが地震学会や地球科学学会だったら、そう苦労はしない)。そういった分野で国際的リーダーを輩出することは、日本という国ができる大切な国際貢献の一つではないだろうか。

次回のINQUA両委員会の学会は、2年後を目指してフランスのDumaがオーガナイズすることを検討してくれることになった。また、今回の成果は“Quaternary International”の特集号の形で来年前半中にまとめられる予定である。

台湾東海岸 都蘭の露頭: 13kaの海成層と波食台が海抜6mに露出し高い隆起速度を示す。(撮影 山口勝)

2001年度IGCP437国際研究集会に参加して

海津正倫(名古屋大学環境学研究科)

2001年9月4日から12日の間、連合王国のドラム大学において、INQUAネオテクトニクス委員会および海岸線委員会との共催のもとにIGCP437の第3回国際研究集会が開催された。全体を通じてのテーマはSea-level Changes and Neotectonics文化研究センター特別研究員の澤井祐紀氏と海津

われた。

参加者はのべ70名ほどに達したが、大部分はイギリスを中心とする西欧圏の人たちであり、それ以外には日本からの南山大学の藤本潔氏、国際日本の3名のほか、インドからの参加者が1名あったのみであった。

ダラム大学地理学教室で行われた学術講演会は4つのセッションにわけられておこなわれた。セッション1では海水準変動研究の方法と応用(8),セッション2では第四紀におけるテクトニクスと相対的海水準変動(4),セッション3では北西ヨーロッパにおける海水準変動とアイソスタシー(6),セッション4では完新世における海岸の変化および海水準とテクトニクス(14)に関する講演があり,全体では32の研究成果が発表された(かっこ内は各セッション毎の発表数)。

これらのうち,セッション1では歴史時代の海水準微変動や地震に伴う相対的な海水準変動を,珪藻・有孔虫などの分析結果にもとづいて高精度の解像度で解明しようとする研究が積極的に行われていたほか,Tastae amoeba^④分析を海水準変動研究に応用しようとする報告が2件あり,注目された。また,セッション2では最終間氷期の堆積物や海成段丘の形成と隆起量の検討に関する研究のほか,バルト海沿岸において最終間氷期の海水準の上昇と完新世のそれとの比較を試みた研究もあり,興味を引いた。セッション3ではイギリスをはじめとする北海沿岸地域における氷床の縮小・消滅後のアイソスタティックな運動についての地形・地質学的な研究のほか,地球物理学的な手法を用いたモデリングやGPSを用いた測地結果とその解析に関する研究成果も報告された。さらに,最も発表数の多いセッション4では,海岸平野およびその堆積物と海水準変動やテクトニクスとのかかわりについての世界各地の事例研究が多く報告されたほか,様々なパラメーターを用いて高精度に堆積物を分析した研究も報告された。

今回の研究集会は西欧圏の参加者が多く,報告された研究地域対象地域もヨーロッパに関するものが多かったため,ややリージョナルコンファレンスといった感もあった。しかしなが

ら,われわれ日本からの参加者にとっては普段身近にはない西欧圏の研究の最前線を理解するとともに,氷床消滅後のアイソスタティックな変動と堆積物や地形との関係に関する研究の比重が高いことや新たな研究手法を積極的に導入しようとする試みなど,その観点の違いや日本の研究水準との比較などをすることができ,きわめて有意義であった。

また,9月8日からは場所をスコットランドに移しての巡検が行われた。現地ではダラム大学のIan ShennanやBen Hortonらによる案内のもとに,Forth Valley西部やFort Williamの北に位置するArisaig地域などのフィヨルドに続く溺れ谷低地において実際にハンドボーリングがおこなわれ,堆積物を観察しながら後氷期の堆積物の分析結果や津波堆積物の認定などについての説明が行われた。また,Glen LoiやLoch Ness^⑤氷食谷などでは谷壁に形成された氷河湖の旧汀線の認定とその意義などに関する解説がおこなわれたほか,Kintail seismic zone やKinloch Hourm Faultにおける氷床消滅後の地盤の隆起によって形成された断層の観察など,第四紀末期における顕著な環境変動を示す多くの事象についての見学がおこなわれ,きわめて充実した内容であった。

この間,9月11日の午後には我々の分乗したマイクロバスにもニューヨークのWTCなどへのテロに関するBraking Newsが入り,時々刻々と伝わるおぞましい状況に大変なショックを受けながら巡検を続けることとなったが,翌12日には無事巡検を終えることができ,参加者一同多くの収穫を得てそれぞれの帰途につくことができた。

日本学術会議第18期第3回
第4紀研究連絡委員会 議事録

日時：2001年6月2日(土) 10:30～13:00
会場：筑波大学学校教育部
出席：海津正倫 大村明雄 小野昭 小泉格 斉藤
享治 齋藤文紀 中村俊夫 町田洋 真野勝友
欠席：米倉伸之 赤羽貞幸 坂上寛一 吉川周作

議題

1. 研連の見直し問題(資料有り 第4部長名
で4部の会員へ当てたアンケートとその趣旨説明
の文書)
議論の要点は以下のとおりである。
・アンケートが前提としている事項に議論の余地が
あり、ただちにこれに応えるわけには行かない。
・空き研連を作って何をおこなうかが議論されてい
ない。
・複数の非推薦研連間で整理統合を進めるような書
き方になっているが、推薦研連、非推薦研連を基
準にした区別は重要ではない。
・地質科学分野の研究連絡委員会の再編案が、地質
科学総合研連で検討されたが、見直し案の編成の
原理が統一性を欠く。
・第4紀研連はINQUA対応研連であるにも関わら
ず、見直し案では第4紀研連だけが専門委にされ
ている。この点も整合していない。
・第4紀研連としても、21世紀の第4紀学の方向を
明確にする必要がある。

議論の結果、アンケートには第4紀研連として意
見をまとめることとし、その際のポイントとして
以下を確認した。

- ・21世紀の科学のあり方から見た第4紀学の位置づ
けをおこない、その視点から再編を考える。横断
的で環境と人類の関係を展望する位置づけをおこ
なう。
- ・国際対応と研連再編を統一的に扱う。
- ・推薦研連、非推薦研連のシステムを見直す必要が
ある。
- ・設けられた経緯と現在の実態を踏まえ、地質科学
総合研連の名称を再考する。

2. 活動計画

シンポジウムの計画 各委員が、今期中にシンポ
ジウムを1つは計画する。次回までにその案を考
えてくることとする。現在具体化しているシンポ
ジウムとして以下がある。小泉氏提案：日本人と
日本文化の源流-日本先史時代の自然と文化的環
境-(資料配布) 2001年7月23日～7月27日
の間の適当な日を調整し実施する。会場は日本学
術会議大会議室を予定。

3. INQUA2007 招致検討問題 (資料有り第1回
WG議事録配布)

WGの動きをどうしていくか。現状は出直しの段
階である。現在INQUAのコミッション関係者、お
よびコミッションの国内委員がまず中心になって
検討する必要がある。中心になる集団の確保が必
須であるが、合わせて、会場、組織委員会、事務

機構などを緊密な連絡を取ることができることを
前提に、それぞれ分掌させて個々の負担を軽減す
る体制の検討が必要であることなどを議論した。

4. その他

JABEE(日本技術者教育認定機構)について若干
意見を交換した。JABEEはいままで「資源」関係
を中心にしているが、その中に「環境」をどのよ
うに組み込むことが可能か、それが鍵になる。日
本第4紀学会の幹事会で議論してもらう必要が
ある。

2001年第2回第4紀研究連絡委員会
INQUA 招致の検討に関するワーキング
グループ会議(拡大) 議事録

日時：2001年6月2日(土) 13:30～16:15
会場：筑波大学学校教育部
出席：町田 洋、太田陽子、小野昭、熊井久雄、小
池裕子、齋藤文紀、真野勝友、中村俊夫、大村明
雄、奥村晃史、鈴木毅彦、三上岳彦、海津正倫、
三浦英樹
欠席：米倉伸之、小野有五、坂上寛一、松本英二、
小口 高、福田正己、大場忠道、小泉格、斉藤享治

1. 報告：

- 1) 太田委員から、第4紀通信の記事に基づいて、
INQUA 日本大会誘致の検討に関わる委員会の設
置およびこれまでの経過報告がおこなわれた。
- 2) 町田委員長により、2月19日に開催された第1
回WG会議の議事録についての確認がおこなわ
れた。

2. 審議

審議は自由討議の形で進められたが、議事録では
予定された議題毎に議論の内容を整理する。

議題：

1. INQUA 日本招致の理念

以下に示すような様々な意見が出された。

- ・これまでややもすると候補地選定が優先され、特
定の地域の人が責任を持つ印象を与える議論が
あった。今後は全日本の第4紀研究者の総力をあ
げるという考え方で進めるべきである。
- ・INQUA の各研究委員会との関係が重要である。
それらの役員など、関わりを持つ人がとくに責任
を持って考えるべきだ。
- ・研究の最先端に触れることのできるワークショッ
プの集合のような形でなければ若い人を引きつけ
られないのではないか。
- ・日本の第4紀研究の変革のターニングポイントに
なれば招致する意味がある。
- ・INQUA を招致することにより日本の第4紀学に
利するところがなくてはならない。
- ・分析的な研究と横断的な研究の両面への対応が必
要であろう。
- ・現在の問題を考えるために第4紀学が重要である
という考えは共通認識としてとらえられるのでは
ないか。現代の問題と関連した第4紀の課題を
テーマとすることができるのではないか。
- ・第4紀学の場合は地球科学のみならず人類・考

古をも含んでおり、Human impact という視点がある。

- ・第四紀研究のコミュニティーの興味と結びついたテーマを考えなくてはならない。
- ・開催地の視点でテーマを選んでも良いのではないか。

2. 招致検討委員会から開催準備委員会への移行
新しい委員会の組織手続き・組織作り、分業体制をしっかりと作ることが重要である。
- ・第四紀学会の会員以外をも含む形で第四紀学の将来を考え、INQUA 大会招致の体制を考える必要がある。
 - ・若い人たちの意見を集約するためにもホームページの活用が必要である。
 - ・第四紀学会においては旧幹事会から新幹事会への引継をきちんとおこなう必要がある。

3. 開催地と財政

国際コンベンション誘致センターの資料にもとづいて、費用、支援メニュー等について太田委員の報告がおこなわれた。なお、海外のkey person が視察することも可能である旨の紹介があったが、とくに急ぐ必要はないとされた。

4. 今後のスケジュール

- ・8月の第四紀学会鹿児島大会に向けて多くの意見を集約するためホームページを活用する。ホームページの利用については奥村委員が作業を進める。
- ・次回委員会は夏の第四紀学会鹿児島大会の時を予定。

(文責：海津正倫)

第3回 INQUA 大会招致検討 WG (拡大・公聴会) 議事録

日時 2001年8月2日 12:00-13:00
会場 鹿児島大学教育学部 中会議室

出席者 遠藤邦彦, 菊地隆男, 久保純子, 熊井久雄, 町田 洋, 真野勝友, 中村俊夫, 小野昭, 大村明雄, 斎藤文紀, 坂上寛一, 鈴木毅彦, 竹村恵二, 佃栄吉, 上杉陽

配付資料

- 1) 2007年までのスケジュール概要
- 2) 国際コンベンションセンターリスト

(議事)

1. スケジュールについて

はじめに町田委員長より、以下のような経緯説明があった。

- ・配付資料1)のスケジュール説明。2001年度中に準備委員会へ移行、2003年INQUA-Reno(USA)で次回開催国決定、組織委員会発足。
- ・INQUA Executive Committeeより招致に関してはいつ頃決定するか(予算・場所を含め)との問い合わせがあり、今年度中に連絡すると回答した。

- ・種々の問題もあるが、検討委員会としては招致可能ではないかとの結論を得そうなので、次回の研連で「検討委員会」を「準備委員会」に移行するよう努力する。
- ・準備委員会では招致にあたり、会場、予算、組織(事務機構) メインテーマを決める。

2. 予算・会場について

- (遠藤邦彦委員) 予算の見積もりはどれくらいか。(町田委員長) 国際コンベンション招致センターによる見積もりは6000万円で、これは多額すぎ、5000万円以内を考える。
- (斎藤文紀委員) 2006年に日本で国際堆積学会の開催を予定している。学会規模・予算はINQUAと同程度と思われる。以下その詳細。
- ・参加者700名、6-7会場使用で予算総額4000-5000万円。
- ・会場使用料は横浜・京都で約3500万円と高く、その他の都市は2000-2500万円。
- ・登録料(一人約3万円)で約半分(2100万円)をまかなう。
- ・事務局はJAMSTEC海洋科学センターに引き受けていただく。
- ・自治体補助については新潟県と福岡県が多く、他の自治体は200万円程度。
- (遠藤委員) 他に招致を考えている国はあるか。(町田委員長ほか) オーストラリアが招致を考えているらしい。まだ決定ではない。
- (産総研 佃委員) 事務局を引き受ける可能性のある産総研での検討結果は以下の通り。
- ・6年先のことから確約はできない。しかしとりあえず事務取扱1名(アルバイト)と1部屋の提供、ホームページ維持管理は可能。
- ・第四紀学会会員が30名位いる。出版や普及活動のためのスタッフがそろっている。
- ・活断層、ネオテクトニクスの研究成果発表ということ、予算を200-300万円獲得可能。
- (斎藤文紀委員) 古海洋会議では学術会議から800万円の補助を受けるが、これは例外的。
- (町田委員長、遠藤委員) コンベンションセンターにすべて事務委託(丸投げ)では予算が足りないが、内部で努力すれば開催は可能であろう。

3. 作業分担について

- (町田委員長) 次回の研連で準備委員会発足を考える。それまでに会場や予算についてさらに情報収集が必要である。会場については、これまでに札幌、筑波、東京、大阪・京都・神戸などの情報を収集した。大阪・京都は高い、また暑い。地方都市はアクセスや宿泊施設に問題がある。この他の会場について手分けをして情報収集して欲しい。
- (大村明雄委員) 会場、会期、参加者、設備などの統一基準を決める必要がある。
- (町田委員長) 後日統一基準案をメールで知らせる。
- (大村委員) 地方都市の場合、人員やアクセス等実際的な問題がある。
- (斎藤文紀委員) 国際堆積学会議の場合、アクセス、ホテル、安い宿、学生向けのホームステイなどのサポートについても検討している。
- (中村俊夫委員) 自治体の補助は「総支出の10%」

などというものが多く、金額だけでもない。
 (町田委員長)参加者総数は1991北京では1000名、1995ベルリン1000名、1999 Durbanでは800名程度であった。したがって800-1000名程度であろう。

各地域の情報収集を以下のように割り振った。

- ・札幌；小野有五委員
- ・筑波；斎藤文紀委員
- ・新潟；立石雅昭委員
- ・金沢；大村明雄委員
- ・名古屋；中村俊夫委員
- ・福岡；小池裕子委員

(上杉 陽委員)2006年に第四紀学会創立50周年となり、記念事業をINQUA大会とリンクさせたい。「東アジア古環境データベース」など、英文での刊行をおこないたい。そのためには年150-200万円ほど予算が必要で、会費の値上げが必要になるかもしれない。

(町田委員長)本格的な準備は2003年INQUA-Renoでの決定後なので、それまでの段階で何をなすべきか等、9月以降の委員会で決めたい。

13:00 閉会。

記録者 久保純子(早稲田大学)

2001年度第2回幹事会議事録

日時:2001年10月27日(土) 14:00-17:00 会場:
 筑波大学学校教育学部 E233

出席:真野勝友,小野 昭,宮内崇裕,小田静夫,
 鈴木毅彦,町田 洋

欠席:熊井久雄,河村善也,竹村恵二,山崎晴雄,
 福澤仁之, 海津正倫,中川庸幸

1. 報告事項

庶務:会員消息8月分,受入図書,自然史学会連合
 運営委員会分担金支払(処理済) について。

行事:2002年大会開催校の公文富士夫会員からの
 準備状況に関する連絡を報告した。

編集:第四紀研究40巻5号の刊行報告,通常号・特
 集号の編集投稿状況,投稿規定等の見直しに関す
 る方針,第四紀研究在庫状況(メモによる報告)。
 渉外:地球惑星科学関連学会の会長懇談会と連絡会
 報告。自然史学会連合運営委員会の予定につい
 て。

広報:第四紀通信8巻5号刊行報告,第四紀通信の
 バックナンバー化について。次号第四紀通信の編
 集・刊行予定と記事募集について(12月1日発行
 予定,11月10日原稿締切)。

企画:2002年初頭シンポジウムと第四紀講習会の
 準備状況。

2. 審議事項

- ・次回評議員会と論文賞選考に関する今後のスケ
 ジュールを確認した。
- ・第四紀研究からの図版転載許可(第四紀研究16巻
 215頁図3 里山の生態学:名大出版会へ)を行
 なった。
- ・学術著作権協会へ「複写に係わる総合的権利委託

契約締結」を行なうことを決定。

- ・2002年大会に関して,開催依頼状と文科省公開促
 進科研費公募申請の準備をする。
- ・第四紀研究41巻の販売価格は,従来の金額に据
 え置くことに決定。
- ・第2回評議員会の日程は,シンポジウムを1日か
 けて行なうので,シンポジウム開催日とは別にす
 る。その場合の日程案として,シンポジウム2002
 年1月19日 評議員会2002年2月9日か,シン
 ポジウム2002年2月23日 評議員会2002年1
 月26日の二案が示され,会場と講演者の都合をも
 とに日程調整を行なう。また,評議員会は午前
 に行い,同日午後にはINQUAに関する会合を開催
 することに決定。
- ・投稿規定等に関する問題提起を編集委員会で議論
 し,次回の幹事会に諮るよう要請。
- ・第四紀通信の発送に間に合わせるために,編集が
 遅れている40巻6号特集号を早めに刊行するよ
 う幹事会から編集委員会に要請することを確認。
- ・地球惑星科学関連学会合同大会のセッション募集
 を,学会会員にも広く呼びかけることにした。
- ・地球惑星科学関連学会合同大会に関する行事幹事
 と渉外幹事の役割分担を明確化する必要性が検討
 された。
- ・次期幹事会を2002年1月5日(土)に行うこと
 になった。

3. INQUA 日本招致に関する報告および審議 (第四紀研連町田委員から)

- ・研連の再編成についての学術会議第4部会最近の
 動向
- ・INQUA 招致の準備に当たって学会への要請

第四紀通信に情報をお寄せ下さい

第四紀学会広報委員会 名古屋大学環境学研究科地理学講座

海津正倫 (e-mail: umitsu@lit.nagoya-u.ac.jp)

〒464-8601 名古屋市千種区不老町 Phone: 052-789-2270

Fax: 052-789-2272

次号は12月下旬原稿締切，2月上旬発行予定です．

第四紀学会ホームページ <http://www.soc.nacsis.ac.jp/qr/> で，
第四紀通信バックナンバーのPDFファイルを閲覧できます．